

〈研究ノート〉

男性家族介護者の在宅介護継続に関わる意識

—首都圏で生活する男性家族介護者に焦点をあてて—

工藤雄行* 平川美和子** 岡田康平*** 高裕子**** 小池妙子*****

*弘前医療福祉大学短期大学部 **弘前医療福祉大学保健学部看護学科

仙台赤門短期大学看護学科 *複十字病院

*****元弘前医療福祉大学保健学部看護学科

Awareness among Male Care Providers regarding Continuation of in-home Care for Family Members:

a Focus on Male Care Providers Living in the Tokyo Metropolitan Area

Yuko Kudo * Miwako Hirakawa ** Kouhei Okada ***

Yuko Taka **** Taeko Koike *****

* Hirosaki University of Health and Welfare Junior College

** Hirosaki University of Health and Welfare

*** Akamon College of Sendai **** Fukujuji Hospital

***** Former Hirosaki University of Health and Welfare Professor

〈要旨〉

本研究は、首都圏において在宅介護に携わる男性家族介護者の、在宅介護継続に関わる意識や、その背景要因について明らかにすることを目的とする。男性家族介護者5名に対し半構造的面接を行い、得たデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、16の概念と7つのカテゴリーを生成した。生成したカテゴリーからは、男性介護者が在宅介護を継続していく上で、内発的要因と外発的要因が存在することが分かった。内発的要因については、在宅介護に取り組む上での原動力となり、モチベーションの向上に影響を及ぼしていた。外発的要因については、各関係機関（専門職）との関係において、良好な場合は信頼や期待を寄せていた。しかし、不適切な対応等が原因となる状況は関係機関（専門職）に対する不満や不信感を生み、抱え込み介護を助長する可能性があった。

〈Abstract〉

The purpose of this research is to clarify the background factors relating to awareness regarding continued in-home care for family members among male care providers living in the Tokyo Metropolitan area. Five male care providers were given a semi-structured interview, and the data was analyzed using the Modified Grounded Theory Approach. As a result, 16 concepts and 7 categories were formed. Of the categories formed, we found the existence of internal factors and external factors influencing male care provider's decisions regarding continued in-home care. Internal factors were a driving force for caregivers and influenced improvement of motivation. External factors played a role in trust and expectation levels when influenced by positive interactions with related agencies or specialists. However, negative interactions with such related agencies or specialists, often lead to dissatisfaction and distrust by the male care givers, and possibly contributed to care overload.

キーワード	
男性家族介護者	male care provider
在宅介護	in-home care
内発的要因	internal factors
外発的要因	external factors

I. はじめに

近年、被介護者の増加に伴い男性家族が介護に携わるケースも多くなっている。平成 28 年版高齢社会白書¹⁾によれば、介護保険制度における要介護者又は要支援者と認定された人は、平成 25 (2013) 年度末で 569.1 万人となっており、15 (2003) 年度末から 198.7 万人増加しているという。また男性家族介護者 (以下、男性介護者) については、社会生活基本調査²⁾によれば、平成 23 年 (2011) 年には 267.5 万人となっており、13 (2001) 年からは、95.4 万人増加している。

筆者らはこれまで、東北の地方都市及びその近郊において、在宅介護に携わった経験のある男性介護者を対象として、在宅介護継続に関する意識や要因を明らかにするための調査を実施してきた³⁾。その結果、要介護状態となった配偶者や親に対して抱く愛情や慈しみの感情が、男性介護者にとり在宅介護を継続する上での原動力となっていた。しかし先行研究では、地方都市を対象とした調査であったため、今回は都市部での傾向を確認するために首都圏を対象として追加調査を実施した。本研究はその一部であり、これまでに調査、分析が終了した内容についてまとめ報告する。

II. 研究目的

男性介護者に対するインタビュー調査を通して、在宅介護継続に関わる意識や、その背景要因について明らかにすることを目的とする。

III. 用語の定義

(1) 内発的要因

在宅介護をとおして男性介護者の中に形成される意識等であり、在宅介護を継続する上でのモチベーションの向上や原動力となる要因

(2) 外発的要因

在宅介護に取り組む上で、男性介護者が関わる人や機関との関係性から生じる意識であり、在宅介護を継続する上で影響を及ぼす要因

IV. 研究方法

1. 研究対象者

首都圏の訪問看護ステーション、デイサービス等へ依頼し、研究承諾の得られた男性介護者 5 名を対象とした。

2. データ収集期間と方法

調査期間は 2015 年 9 月～11 月である。研究承諾の得られた男性介護者宅を訪問し、60～90 分の半構造的面接を実施した。なお、面接内容は予め了承を得てから IC レコーダーに録音した。

3. データ分析方法

本研究では、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。分析テーマは「男性介護者の在宅介護継続に関わる意識」、分析焦点者は「在宅において直接介護に携わる男性家族」とした。男性介護者の語りを比較し、分析テーマを踏まえて、内容が最も充実していると判断したのから分析を始めた。全ての語り (逐語録) を通読した後、各質問項目におけるエピソードを取り上げ、短文として定義づけを行い、その定義したものに概念名をつけた。概念生成には分析ワークシートを用い、2 事例以降も同様の方法で、各生データを分析し、先に生成された概念と内容が酷似しているものがあれば統合する、異なる内容であれば再度、意味づけや解釈を行い、新たに概念を生成した。全ての概念の生成後には、各概念に共通する内容をカテゴリーとして生成し、各カテゴリーの相互関連性を踏まえ構造化、図式化した。各事例から導き出された概念の妥当性や意味づけ、解釈方法、カテゴリー生成や図式化等については随時研究者間で検討を行

い、内容の妥当性を確認した。

4. 倫理的配慮

本研究は、弘前医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。研究対象者に対しては、研究協力依頼書・説明書を用いて研究目的・趣旨の他、研究協力の自由意思・拒否権の尊重、プライバシー・個人情報の保護等についても伝え、同意書への署名をもって研究協力の意思を確認した。

V. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象者の概要については、表1に示す。

2. 分析結果について

(1) カテゴリーと概念について

本研究で明らかになったカテゴリーと、各カテゴリーに付随する概念及びその定義については表2のとおりである。また、概念ごとの男性介護者の語りの具体例（バリエーション）については次のとおりである。

以下、カテゴリーには【 】, 概念には< >, バリエーションには“ ”を表記する。なお、男性介護者の語りの文脈を把握できないと判断する箇所や、補足が必要だと判断する箇所には、括弧（ ）内に筆者Kが言葉を補った。

①【夫（息子）としての責任感、自覚】

一つ目の<被介護者の面倒をみるのは家族の責任>では“（在宅介護を決めた理由を伺うと）やっぱり、お母さんが子供を育てんの苦に思う人って

る？それと同じじゃないの…。（子が親の介護をするのは）本能的なものでしょ。”等がある。二つ目の<献身的な姿勢>では“（子供達には母親の介護を）やらなくていいって言った。自分たちのあれも（仕事や生活も）あるから。”等がある。

②【被介護者への慈愛】

一つ目の<被介護者に対する同情>では“母は、耳も聞こえないし、言葉もない…。なんか惨めというかね、可哀そうに思ったんで、（介護施設への入所は断って）私が引き取っちゃいました。”等がある。二つ目の<被介護者に対する愛情>では“母は戦争で夫、私の父ですけど戦争で亡くなって…。大変で、東京も焼け野原になってね…ろくに食べ物もないような時代だったけど、とにかく私は困ったって自覚がないぐらいやってきてくれたんでね…”等がある。

③【被介護者への安心、安全、安楽な介護の提供】

一つ目の<安心、安全、安楽なケアの追求>では“最初はね、（入院先の病院で色々教わった介護技術等をやってみたが）ダメでしたけどね。…うまくいかない…工夫するしかないですよ。…ある程度教わったやつを色々。”等がある。二つ目の<これまで培ってきた知識や技術を活用>では“（男性介護者が、様々な工夫している点について触れると）やっぱり仕事が、そういう細かいこと気使わなきゃいけないから。そういうのが生きてるんでしょね。”等がある。三つ目の<気分転換方法の確立>では“（気分転換の方法は）必ず一日一回買い物に

表1 対象者の概要

No.	対象者 (男性介護者)	年齢 (歳)	被介護者 との関係	定職	同居家族 (被介護者 以外)	在宅介護 期間(年)	介護サービス 利用状況
1	A	80	夫	無	無	4ヶ月	なし
2	B	76	夫	無	無	10	訪問看護・訪問介護・訪問入浴
3	C	59	夫	有	無	3.5	小規模多機能型居宅介護
4	D	65	夫	無	無	4	訪問看護・訪問診療
5	E	74	息子	無	介護者の妻	4	訪問看護・訪問介護・訪問入浴・ 訪問診療

表2 男性介護者の在宅介護継続に関わる意識から明らかになったカテゴリー、概念及びその定義

	カテゴリー	概念	定義
内発的要因	1 夫(息子)としての責任感, 自覚	被介護者の面倒をみるのは家族の責任	被介護者の面倒をみるのは家族として当然のことであるという意識をもつこと
		献身的な姿勢	何事においても被介護者や家族のことを最優先に考えること
		被介護者に対する同情	自宅から離れて施設等で暮らす事を不憫に感じ, そのような思いをさせたくないという意識をもつこと
	2 被介護者への慈愛	被介護者に対する愛情	長年連れ添った妻に対する愛情や、育ててくれた親に対し感謝の念をもつこと
		安心, 安全, 安楽なケアの追求	被介護者にとって, 安心, 安楽なケアとは何かということを常に考え追及すること
	3 被介護者への安心, 安全, 安楽な介護の提供	これまで培ってきた知識や技術を活用	職業体験や社会経験等, 男性介護者がこれまで培ってきた知識や技術を活用すること
		気分転換方法の確立	介護者それぞれの気分転換方法を確立すること
外発的要因	4 在宅介護の意味を見出す	在宅介護の日々を大切にしようとする姿勢	在宅介護の一日一日を, 悔いのないように努めようとする
		介護は生きがい	在宅介護への取組自体が介護者にとって生きがいとなっていること
		自らの介護経験を社会に還元	自らの介護経験や取組を世間に役立てたいという意識をもつこと
		在宅介護を通して人生を達観	介護することは介護者自身にとっても, 何か意味のあることであると考えること
	5 病院, 介護施設, 行政担当者に対する不満, 不信感	病院, 介護施設, 行政担当者に対する不満, 不信感	被介護者が入院する病院(入所する施設)等において, 被介護者や家族の要望, 思いが十分に汲みとられず, 個別対応が行き届いていない状況が不満や不信感を招くこと
		在宅介護に欠かせない専門職(機関)	在宅介護継続を可能にする, 親身になって対応してくれる医療, 介護スタッフ等の存在があること
	6 公的サービスの利用と期待	専門職(機関)による家族支援に期待	在宅介護においては家族支援の必要性を感じているが, その役目を訪問看護(介護)スタッフに期待すること
地域住民の理解と協力		疎遠にならず, 過干渉にならない地域住民との関係性があること	
7 身近なサポーターの存在	家族間での支え合い	在宅介護継続を可能にする, 家族間の助け合いがあること	

出かけるんですよ。外に出るようにするんです。”等がある。

④【在宅介護の意味を見出す】

一つ目の〈在宅介護の日々を大切にしようとする姿勢〉では“（介護を続けて行く上で心がけていることは）言葉でいうと、日々お見送りってことですかね…”がある。二つ目の〈介護は生きがい〉では“すごく手がかかるわけですよ。食事でも。プーってやったり、プアーって出したりね（食事を口からわざと吐き出したりする）、そうすると、施設や何かで他人の事いくら思っている、職員は腹立たしい気持ちになるでしょ？それがなんないですよ。自分で見てれば。”がある。三つ目の〈自らの介護経験を社会に還元〉では“病気が治って、（被介護者を病院から自宅に）戻していいかどうかの判断のために、（ある家族は）今相当考えてる、悩んでるようですね。それで、どういう準備をすれば戻せんのか、その参考のために見学に見えたりするんです。”がある。四つ目の〈在宅介護を通して人生を達観〉では“哲学的になるけど、人は産まれてきて、自分の為じゃなくて人の為になんて産まれてきたんだなってそういう風に思わなきゃダメなんだとかね…。だから（介護は）苦にならないんです。”がある。

⑤【病院、介護施設、行政担当者に対する不満、不信感】

〈病院、介護施設、行政担当者に対する不満、不信感〉では“たまたま入れたところ（介護施設）が、寝かせっきりの扱いだったんですね。ベッドに寝かせて、テレビ見せておけば安心だって、そういうことになっちゃうんでしょうけど…ひどいなって思いましたね。”等がある。

⑥【公的サービスの利用と期待】

一つ目の〈在宅介護に欠かせない専門職（機関）〉では“いざという時は〇〇さん（事業所職員）に聞けばいい。僕が全部一人で看るっていうのは、無理だろうと思っています。”等がある。二つ目の〈専門職（機関）による家族支援に期待〉では“普段、日本語で会話する機会がないわけですよ（被介護者以外の他者との交流は皆無）。ですからね、家族のケアっていうか、そういうことも考えて欲しいですね。”等がある。

⑦【身近なサポーターの存在】

一つ目の〈地域住民の理解と協力〉では“一応、町会に入っているんですけども、まあ、色々大目にみてもらってるところがあって、例えばゴミ捨て場の掃除ですとか…優遇された状態で…”等がある。二つ目の〈家族間での支え合い〉では“息子が二人いますので、多少（家のことや介護の）手伝いはしてくれる。”等がある。

(2) ストーリーライン

分析結果の全体像を、男性介護者の在宅介護継続要因関連図（図1）と以下のストーリーラインにて示す。男性介護者は、家族が要介護状態になった場合、次の2つのルートの内、どちらか一方を選択していた。一つは、施設入所等はせず、在宅介護を始めるルートである。その背景には、夫（息子）として介護をするのは至極当然なことであるという意識【夫（息子）としての責任感、自覚】、施設入所等で不憫な思いをさせたくないという気持ち等の【被介護者への慈愛】が大きく影響していた。

また、もう一つのルートは、家族が専門的なケアが受けられることを期待して、福祉施設への入所（病院への入院）を選択することである。時として、個別ケアが実践されていない状況や相談に赴く行政担当課においても親身な対応がなく【病院、介護施設、行政担当者に対する不満、不信感】という意識を抱く。そして男性介護者の中で【夫（息子）としての責任感、自覚】や【被介護者への慈愛】という2つの意識が次第に顕在化しはじめ、在宅介護に取り組むことを決意する。どちらのルートの場合であっても、在宅介護生活が進むと自らの介護方法を見直し、創意工夫が見られた【被介護者への安心、安全、安楽な介護の提供】。各専門機関（専門職）との関係が円滑な場合は、やはり専門機関（専門職）との情報共有や連携、行政からの様々な支援が今後も必要であるという意識や、家族支援の役割も果たして欲しいと期待していた【公的サービスの利用と期待】。地域住民との関わり合いの中では、被介護者のいる世帯に対して、町内会活動等であまり負担をかけまいとする配慮があり、同居家族がいる場合には、無理のない範囲での家事や介護に対する協力もある。そのような状況は男性介護者に対する身近なサポー

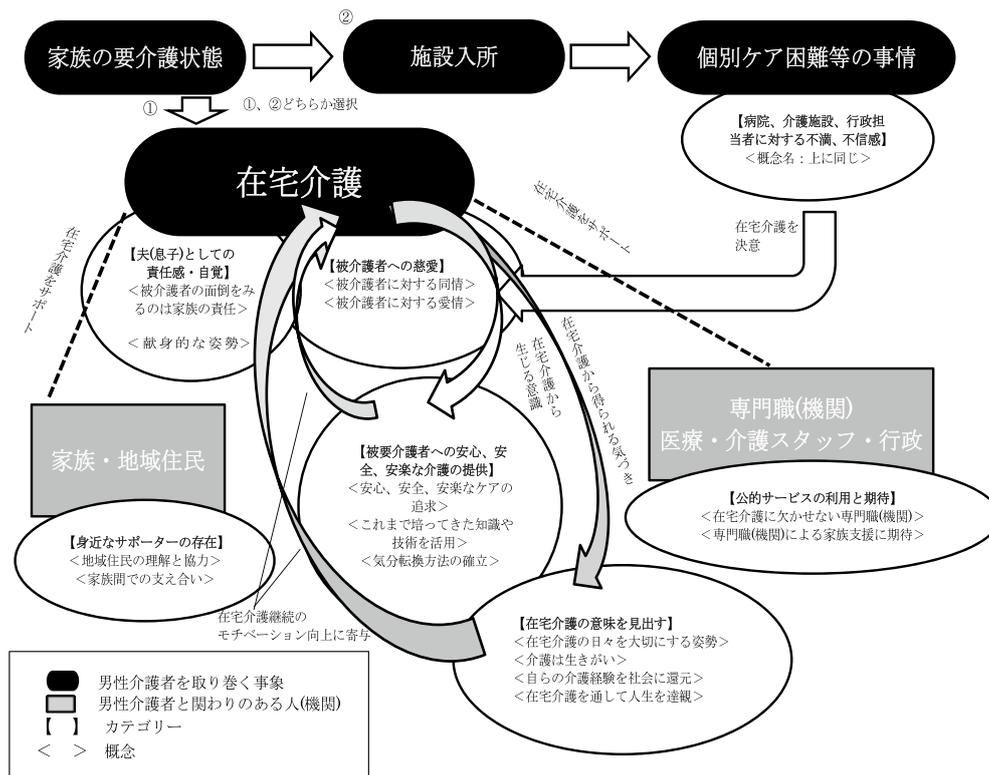


図1 男性介護者の在宅介護継続要因関連図

ターとなりうる【身近なサポーターの存在】。男性介護者の中には、在宅介護生活とは単に日常的に繰り返される介護行為の連続ではなく、在宅介護そのものに何かしらの意味づけを行い、自分の人生にとって有益なもの、意義のあるものであると捉えている者もいた【在宅介護の意味を見出す】。在宅介護生活を通して男性介護者の中に形成される【被介護者への安心、安全、安楽な介護の提供】、【在宅介護の意味を見出す】という意識のカテゴリーは、男性介護者自身の在宅介護に対するモチベーションの向上に寄与していた。

VI. 考察

本研究で明らかになったカテゴリー内容を踏まえ、男性介護者の在宅介護継続の要因について、内発的要因、外発的要因2つの側面から考察する。

1. 内発的要因

(1) 在宅介護継続の原動力と、それが起因となる懸念について

今回明らかになったカテゴリーのうち、【夫(息子)としての責任感、自覚】【被介護者への慈愛】

については、被介護者と男性介護者との間に存在する、長年の家族関係の中で培われてきた絆や、配偶者に対する愛情に起因するものである。小池らの先行研究³⁾においても、在宅介護に取り組む上では、男性介護者に長年連れ添った妻、親に対する愛情と慈しみの感情が出現しており、これらの愛情や慈しみの思いが、いかなる状況であっても在宅介護を継続していこうという男性介護者の根底にはあることが明らかになっている。また、宇多、都築、金川⁴⁾の調査においても、男性介護者が介護を引き受けた理由として「家族としての義務」が一番多く、次いで「当たり前・できることをする」という回答が多いという結果がでており、これら2つのカテゴリーは在宅介護継続における原動力であり、最も重要なコアカテゴリーであると位置づけることができる。

しかし場合によっては、このカテゴリーに該当する意識が男性介護者の中で顕著になると、大切な家族のケアは自分一人で行いたい、例え専門職であっても任せたくないという思いに至ることもある。“（介護の上では）見極めがあるでしょ？ヘルパーさんに迷惑かかっちゃう。だから頼めないんですよ。

だから離れられない。”、“前に（実家の母に）あった時に言ったんですよ。はっきりいって、（妻の介護があるから）もう（母親の）死に目には会えないからねって…”という語りからは、いかなることがあっても他者に頼らず一人で看なければならぬという思いや、在宅介護における男性介護者としての非常に強い責任感、使命感が感じられる。また、このような思いは時として男性介護者自身の健康面に大きく影響を及ぼす場合もある。“（介護者は大腸がんを患っている）先生が、手遅れになる前に必ず精密検査受けて下さいっておっしゃるんですが、そういう時間がないんですよ（介護で忙しい）。まあ、別に大丈夫だと思ってるんですけどね。”、“この間、区民検診あったから、（持病の事を）話したら、すぐどっか病院行って調べろって。特にどこか痛くなることもないんで、まあいいんじゃないかと。”という語りからもわかるように、男性介護者は何事においても被介護者のことを最優先に考え、たとえ自身が病気を患っていても、自らの健康状態を顧みず、ただひたすらに献身的に被介護者に尽くす様子が窺える。永井、堀、星野ら⁵⁾の男性介護者の心身の健康についての特性に関する調査によれば、男性介護者自身は自己の身体的健康について「痛み」という具体的な問題を自覚しながら介護を行っている傾向にあることや、自身の健康を低く見積もっていることが明らかにされており、今回の研究対象者の実態とも一致する部分がある。以上のことから、【夫（息子）としての責任感、自覚】【被介護者への慈愛】というカテゴリーは、在宅介護を継続していく上での大きな原動力になりうるだけでなく、そのカテゴリーに関わる男性介護者の認識が過度に顕著な場合、男性介護者自身の健康を害する事象を引き起こす要因、ひいてはいかなることがあっても他者には任せられないという思いから、抱え込み介護を引き起こす要因にもなりうると言える。

(2) 在宅介護継続に影響を及ぼす諸要因について

【被介護者への安心、安全、安楽な介護の提供】においては、最初は訪問介護職員等の専門職が行う身体介護の方法を見よう見まねで行うが、次第に男性介護者自身がやりやすい方法にアレンジする等し、独自の介護方法を確立していることがわかっ

た。また、その方法は男性介護者が被介護者の状態をアセスメントした上で導き出された、自立支援の視点に基づくものである。男性介護者が介護する上で創意工夫をしている事象については、小池ら³⁾の他、津止、齋藤⁶⁾も、日常的に介護を継続していくにあたって、多くの男性介護者は、さまざまな工夫を試みているとし、事例を紹介している。【在宅介護の意味を見出す】ということについては、男性介護者がそれぞれの視点をとおして在宅介護の本質について洞察し、介護そのものに何かしらの意味や価値観を見出していた。宇多、都築、金川⁷⁾も、男性介護者の中には、在宅介護をとおして「生きがい」という価値を認識し、生きる源のように捉えている場合もあると述べている。これら2つのカテゴリーは、前述したように、在宅介護生活を通して時間的経過と共に次第に男性介護者の中に形成されるが、男性介護者自身が在宅介護に取り組む上でのモチベーションの向上に寄与している。男性介護者の“（介護する上では）工夫しないとね。そうしないと私、飽きちゃう。”、“（介護の場面では）まあ、楽しむっていうか、きれいにしてあげようっていうのはありますね。”という語りからも、在宅介護の場面での創意工夫が男性介護者の更なる向上心に繋がり、また、被介護者が快適だと感じられるような介護をしたいという思いが在宅介護継続にプラスの作用を与えていると考える。

2. 外発的要因

(1) 男性介護者を取り巻く環境について

【病院、介護施設、行政担当者に対する不満、不信感】については、各専門機関に勤務する職員の、不適切な言動が男性介護者の不信感に繋がり、在宅介護を決意させるきっかけにもなることがわかった。また、一度根づいてしまった不信感は容易には払拭することができない。ある男性介護者はインタビューの中で“（最近高齢者虐待のニュースが多い事について）あれね、わかりますよ。そういうもんだと思ってます。だから、（介護施設等に）任せられない。”と述べていた。この語りからは、男性介護者が高齢者施設に対して、大きな不信感を抱いている様子や、在宅介護に臨む上での揺るぎない覚悟が伝わってくる。高齢者施設に勤務する専門職は、

介護に携わる専門職としての責任感や自覚について再認識し、被介護者に対して適切なケアを遂行していかなければならない。また、家族の声にも耳を傾け真摯に対応する姿勢が望まれる。また、このような状況は、“（訪問介護等を利用しない介護者に今後もその意思はないのか伺うと）そういう気はないな。まあ何とかの会（地域にある介護者の会等）とかあったんですけど、多分そういうのにはこれからも出ないと思います。”という語りにもあるように、介護を継続する上で、本来であれば男性介護者の重要なパートナーとなるであろう在宅介護サービス等の利用という選択肢をも消失させ、引いては抱え込み介護の要因ともなりうることも忘れてはならない。

これとは逆に、専門機関に信頼を寄せ、在宅介護継続の上でなくてはならない存在だと認識している場合には【公的サービスの利用と期待】というカテゴリーが存在していた。“〇〇（訪問看護事業所）はよくやってくれるからね。何か言えば院長先生来るし、すぐ連絡してよって。”、“（在宅介護において）僕が全部一人で見るといってというのは、無理だろうと思っています。”という語りからも、公的サービスの利用が在宅介護を行う上で必要不可欠になっている様子がわかる。津止、齋藤の調査⁸⁾によれば、介護生活の中で頼りにしている人・機関については、「家族」よりも、「ケアマネジャー」、「かかりつけ医」、「ヘルパー」等、専門機関（専門職）を選択している割合が高いという結果がでていいる。また、信頼を寄せる専門機関（専門職）だからこそ、介護者支援の役割についても果たしてくれることを期待していた。認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）⁹⁾の一つに介護者支援が盛り込まれている。その中では、認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う認知症カフェ等の設置を推進していくことが挙げられている。しかし今回の研究対象者の中には、外出する時間を設けることが困難であり、参加が難しい状況にある者もいたため、介護者参加型の支援体制の他にも、専門職が男性介護者宅を訪問し相談に乗る、助言をする等の訪問型支援体制も必要があると考えられる。

【身近なサポーターの存在】については、前述の津止、齋藤の調査結果⁸⁾において、介護生活の中で頼りにしている人・機関については、家族よりもケアマネジャー等、専門機関（専門職）を選択している割合が高いことを紹介した。しかしそれは、家族を信頼していないということではなく、家族に在宅介護の負担をかけたくないという気持ちの表れではないかと推察する。男性介護者の“（子どもたちには母親の介護を）やらなくていいって言った。若いあれだからね。まだね。自分たちのあれもね（生活もあるから）。”という語りからも、子供には子供なりの生活があるので、介護による負担をかけることはしたくないという、男性介護者の子供への気遣い、親心が感じられる。しかし子供等、同居家族に関しては全く関わらないという訳ではなく、前述したように無理のない範囲での家事や介護への協力が存在していた。また、近隣住民との関係においては、疎遠にならず、過干渉にならず、適度な距離を保ちながら、在宅介護世帯に対する配慮があった。今回の研究対象者である男性介護者が暮らす地域では、男性介護者と住民との間に良好な関係性が構築できている様子を垣間見ることができたが、必ずしもそのようなケースばかりではない。地域住民に在宅介護についての理解がなければ、在宅介護世帯の地域での孤立化や、抱え込み介護の要因にもなりうる。地域包括ケアシステムの構築における今後の検討のための論点¹⁰⁾においては、地域包括ケアシステムの構築において市町村がその中心的な役割を担うべき立場にあり、介護保険だけではカバーしきれない部分（「自助」の活用や「互助」の組織化、「公助」による支援など）について様々な方法によって問題解決を図っていくことも重要な役割であるとしており、その期待値は大きい。

Ⅶ. 結論

男性介護者の在宅介護継続に関する意識から生成されたカテゴリーを踏まえ、以下のことが明らかになった。

1. 内発的要因について

(1) 【夫（息子）としての責任感、自覚、被介護者への慈愛】に関しては、在宅介護を継続して

いく上での大きな原動力になりうるだけではなく、そのカテゴリーに関わる男性介護者の認識が過度に顕著な場合、男性介護者自身の健康を害する事象を引き起こす要因や抱え込み介護を助長する恐れもある。

- (2) 在宅介護をとおして男性介護者の中に形成される【被介護者への安心、安全、安楽な介護の提供、在宅介護の意味を見出す】に関しては、男性介護者自身が在宅介護に取り組む上でのモチベーションの向上に寄与している。

2. 外発的要因について

- (1) 【病院、介護施設、行政担当者に対する不満、不信感】に関しては、各専門機関（専門職）の、被介護者に対する不適切なケアや男性介護者の心に寄り添ってこない対応が原因となり発生する。このような状況は、訪問介護サービス等の利用を阻害する要因や抱え込み介護を助長する恐れもある。しかし、関係が良好な場合は【公的サービスの利用と期待】が存在する。
- (2) 【身近なサポーターの存在】に関しては、近隣住民の疎遠にならず過干渉にならず、適度な距離を保ちながら、在宅介護世帯に対する配慮があった。家族間においては、無理のない範囲での家事や介護への協力があり、男性介護者は家族へ介護負担が及ばないように気遣う様子が見られた。

Ⅷ. 本研究の限界と課題

本研究の限界は、対象者が5名と少なかったことである。今後は更に調査対象数を増やし、追加調査を継続していくと共に、分析から明らかになった在宅介護継続に関わる意識を参考に、男性介護者支援の具体的内容についても検討していくことが今後の課題である。

また、本研究では首都圏と地方都市との男性介護者の意識の相違点や類似点を見出すことまではできなかったため、今後明らかにしていきたい。

付記

本研究は平成27年度弘前医療福祉大学学長指定研究により行われた。

引用文献

- 1) 内閣府：平成28年版高齢社会白書(全体版)(PDF形式), 23-24
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s2s_3_2.pdf (2018年9月25日検索)
- 2) 総務省統計局：平成23年社会生活基本調査, 36
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf> (2018年9月25日検索)
- 3) 小池妙子, 工藤雄行, 平川美和子, 大沼由香, 寺田富二子, 東谷康生, 高祐子：在宅において認知症者に対し男性介護者が抱える葛藤と支援の方向性, 公益法人 在宅医療助成 勇美記念財団2013年度(前期)在宅医療助成報告書：2013
- 4) 宇多みどり, 都築千景, 金川克子：訪問看護を利用している男性介護者の実態と支援ニーズ－夫介護者と息子介護者の比較による検討－, 神戸市看護大学紀要, 21: 49-59, 2017
- 5) 永井邦芳, 堀容子, 星野純子, 浜本律子, 鈴木洋子, 杉山晃子, 新實夕香理, 近藤高明, 玉腰浩二, 榊原久孝：男性家族介護者の心身の主観的健康特性, 日本公衆衛生雑誌, 58(8)：611, 2011
- 6) 津止正敏, 齋藤真緒：男性介護者白書 家族介護者支援への提言, 80, かもがわ出版, 京都, 2007
- 7) 宇多みどり, 都築千景, 金川克子：訪問看護を利用している男性介護者の実態と支援ニーズ－夫介護者と息子介護者の比較による検討－, 神戸市看護大学紀要, 2: 56, 2017
- 8) 津止正敏, 齋藤真緒：男性介護者白書 家族介護者支援への提言, 69, かもがわ出版, 京都, 2007
- 9) 厚生労働省：認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)－認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて(概要)－,
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000072246.html> (2018年9月25日検索)
- 10) 三菱UFJリサーチ & コンサルティング：持続可能な介護保険制度及び地域包括ケアシステムのあり方に関する調査研究事業報告書<地域包

括ケア研究会＞地域括ケアシステムの構築にお
ける今後の検討のための論点 ,10

[http://www.murc.jp/uploads/2013/04/
koukai130423_01.pdf](http://www.murc.jp/uploads/2013/04/koukai130423_01.pdf) (2018年9月25日検索)